2023.09.02

国際卓越研究大学

小嶋祥三

文部科学省は本当に訳が分からないことをする。何だ!?この構想は。トップダウン的な研究体制を整えれば、世界をリードする研究が生まれると考えているようだ。日本のノーベル賞の研究は、そういった体制から生まれたのだろうか。若手研究者個人の自由な発想や情熱が、結果として、ノーベル賞になったのではないか。

この制度はボス的な研究者を増長させることになるだろう。ボスは下の若手に自分の研究テーマや考え方を押し付ける傾向がある。研究資金や人事権を握ることになるので、そうなりやすい。このような体制から画期的な研究が生まれるだろうか。霊長類研究所を潰した松沢哲郎はかつて科研費の特別推進研究などで、多額の研究費を得ていたと記憶する。その結果、彼が若手に対してどのように振舞ったか、考えてほしい。不祥事が発覚して、それに巻き込んでしまった若手に彼は謝っただろうか。

結局、東北大が採択され、東大、京大は選ばれなかった。京大が選ばれなかった一因は霊長研の研究費不正があるのではないか、という推測が新聞に載っていた。もし、そうであるならば、霊長研というか、松沢らは大学に対してとんでもないダメージを与えたことになる。その点、関係者として申し訳なく思っている。

ただ、別の見方も可能かなと思った。わたしは霊長研解体の処分は不当に重いと考えている。松沢の不正行為を知らず、不正に関わりのない部門、分野が消滅した。その背景に、この国際卓越研究大学への応募があったのではないか。ガバナンスが強調される制度である。霊長研を必要以上に厳しく処分することが、国際卓越研究大学に採用されるには必要と考えたのではないか。しかし、そのような対応は京大が学問についてマトモに考えていないことを明らかにしてしまった、と思う。文科省の意向に従うことだけが、大学や研究を発展させる道なのだろうか。

国立大学の法人化では、研究成果を納税者に還元しろとか、研究費は自分で稼げ、ということが言われた。国立大学の法人化以降、国立大は研究費の減額などで苦労しているようだ。別に多くを望んでいるわけではない。国立科学博物館は法人化で、博物館の維持すら困難になり、クラウド・ファンディングで一息ついているという。法人化により、全国の国立大学が同じような状況に陥っているとしたら、そのような大学から画期的な研究が生まれるだろうか。